

「なぜ、当事者から？ 現場から？ なぜ、倫理を変える必要が？」

その人が見ている景色を知るためには

NPO 法人シニアラフ情報センター 小瀬有明子

障がいを持った人が仕事を始めるには、その人の気持ちが外に向けられる必要があると思う。障がいのために様々な偏見や差別、迫害を受けてきたであろう彼らにとって、その経験を持ちながらも思い切って外にでようとするには、とても大きな決断があったのではないだろうか。

本人だけでなく、その周りの人も望んでいたとしても、その気持ちを外に向けるまでには、長い時間がかかるだろう。

長年引きこもっていた人がそう簡単に、気持ちを外に向けられるとは思えないから。

「とりあえず、事業所への見学だけ」といっても、そこに行き付くまでには、利用者と野々村さんたちセンターのスタッフとの間に信頼関係がなければきっと行きつけないだろう。その信頼関係を築き上げるための時間や労力はいかばかりかと思う。

「その人が見ている視点や景色を大切にしたい」という気持ちを持った対応や関わり方がその人たちに伝わり、そこから信頼関係が築かれていくのではないか。

その時間の長さや深刻さは、笑いを交えてお話しされる野々村さんからは見えない。そこが野々村さんのすごさではないかと思う。

「この狭い空間で長い時間一人でずっと生活できている人を憧れる」とさらっと何事もなく言える野々村さんを尊敬する。そういえるように、野々村さんがなられた過去、経歴はどんなものなのか知りたいとも思った。

近江商人の「三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）」の精神を逆手に取り、近江商人の誇りを擦りつつ、彼らのためにどうすれば、企業だけでなく、地域住民も巻き込んで支えていくことができるのかを考えて作られた仕組みや精神は、今、注目されている「地域包括ケア」に最も必要なことだと思う。

「お金のないところ」とも話されてもいた。資金が潤沢にあることが必ずしもいいこととは思わないが、関わっておられる方のボランティア精神だけにすがって運営する必要がないような支援も必要だと感じました。

後期の授業で一貫して流れていたことは、認知症になった高齢者も、障がい者も、性的マイノリティの人たちも、みんな同じ社会の一員。誰もが必要とされていること、人の役に立てることを実感したいと考えているということだと思いました。

この世に生を受けた人はすべて、障がいの有無に関係なく、他者のため役に立ちたいと考えていることをしっかり受け止め、それを受け入れることができる社会になってほしいと思います。そのために私に何ができるか考えていきたい。

とても有意義なお話、ありがとうございました。